

二〇二三年度

日本近世文学会秋季大会

- ・大会プログラム
- ・講演・ワークショップ要旨
- ・研究発表要旨

期日 十月二十八日(土)・二十九日(日)・三十日(月)
会場 東北学院大学・土樋キャンパス
〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目三一

一、参加申込および参加費の支払いは、Pentixもしくは郵便局備え付けの振替用紙(口座番号〇〇二六〇〇一―一〇二八二三 口座名「日本近世文学会」) 支払いの内訳を必ず明記のこと)にて、十月九日(月)までにおこなってください。(Pentixからの申込は十三時締切)。

一、大会経費は、参加費千五百円、懇親会費二万円(大学院生・学部生六千円)です。

一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(早稲田大学)へお申し出ください。

一、大会経費をPentixからお支払いの場合は、システム上で領収書の発行が可能です。振替用紙にてお支払いの方、学会印入りの領収書が必要な方は、会場受付にて発行いたします。可能な限り、事前に学会事務局(早稲田大学)へお申し出くださいようお願いいたします。

一、昼食の用意はございませんので、各自でご持参ください。

一、東北学院大学会場でご参加の方には、受付で資料集(冊子)をお渡しします。不参加の方への郵送は今回はおこないません。

一、三日目(十月三十日)の文学実地踏査は、資料をご用意いたしますので、各自でお回りください。

一、年会費の振込は大会参加費とは別途お願いいたします。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。

一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。

一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。

一、お急ぎの御用は左記へご連絡ください。

日本近世文学会二〇二三年度秋季大会実行組織代表

東北学院大学 金 永晃

メールアドレス comf@kinseibungakukai.com

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、二〇二三年度秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇二三年九月十八日

大会プログラム

【会場】東北学院大学土樋キャンパス／オンライン会場

【行事】

第一日 十月二十八日（土）

委員会（二二・二〇～二三・二〇）

委員会会場 八号館三階 第三会議室

会場開室（二三・三〇）

開会時間（二四・〇〇）

講 演（二四・二〇～二五・二〇）

講演会場 八号館五階 ホール

伊達騒動と文学・芸能——史実と虚構のあいだ——

東北大学名誉教授・宮城県慶長使節船ミュージアム館長 平川 新

若手研究者ネットワーキング促進企画関連ワークショップ（一五・四五～一七・三〇）

「世代を超えて、話し合おう」

ワークショップ会場 八号館三階 第三・第四会議室

懇親会（二八・三〇～二〇・三〇）

懇親会場 江陽グランドホテル 翡翠の間 〒980-0014 仙台市青葉区本町二丁目三一

日本近世文学会秋季大会実行組織代表 金 永昊
日本近世文学会事務局代表 池 澤 一 郎

〔日本近世文学会事務局〕

早稲田大学文学学術院 池澤一郎研究室

〒162-8644 東京都新宿区戸山一―二四―一

電 話 〇三―五二八六―三七二一（呼出）

メールアドレス info@knseshungakukai.com

第二日 十月二十九日(日)

会場開室(一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部(一〇・三〇〇〜一二・三〇)

研究発表会会場 八号館四階八四二教室

1 山東京伝『梅之与四兵衛物語 梅花氷裂』の再検証

——粟野十郎左衛門を通じた物語構造——

早稲田大学(院) 小林 俊輝

2 曲亭馬琴の著作における〈悪人〉像

——文化年間初頭の作品を中心に——

大阪大学(院) 池田 真紀子

3 十返舎一九『黄金花咲陸奥帖』にみる詩歌の活用

——宗任伝説の変容と名所和歌の地誌的想像——

ハイデルベルク大学(院) フィンク ウィクトル

昼・休 み(一二・三〇〇〜一四・〇〇)

編集委員会会場 八号館三階 第三会議室

研究発表会 午後の部(一四・〇〇〇〜一六・〇〇)

4 近世後期における性霊派の和歌題漢詩について

九州大学(院) 王 自強

5 『玉箏子』三ノ一「清水寺の詩」における典拠と石川丈山像

名古屋大学博士研究員 森 翔大

6 乃翁の東北行脚と『去来抄』故実編

日本女子大学 福田 安典

閉会(一六・〇〇)

第三日 十月三十日(月) 文学実地踏査 各自・各グループでお回りください。

講演要旨

伊達騒動と文学・芸能

——史実と虚構のあいだ——

東北大学名誉教授・宮城県慶長使節船ミュージアム館長

平川 新

伊達騒動とは、万治三年（一六六〇）の仙台三代藩主綱宗の強制隠居事件と、寛文十二年（一六七二）に仙台藩奉行原田宗輔が幕府大老邸で起こした刃傷事件のことをいう。

綱宗は放蕩と乱行が過ぎて家臣や親戚大名の不信を招き、強制隠居させられた。だがこの事件は、伊達政宗末子の伊達宗勝と幕府老中酒井忠清が共謀した仙台藩乗っ取り陰謀事件としてもとらえられた。それは、宗勝が幼君4代藩主亀千代の後見人となつて藩政の実権を握つたことで、さらに増幅された。一門の伊達宗重は宗勝の専横を幕府に訴えて受理され、老中評定が開かれる。その場で対決したのが宗勝腹心の原田だった。不利を悟つた原田は、逆上して宗重を斬殺した。

世上を騒がすこうしたスキヤンダルは、とうぜん世間の耳目を集めた。伊達騒動を題材にした多くの実録物が流布し、歌舞伎・浄瑠璃でも人気演目になった。筋立ては虚構に満ちているが、丹念に検討してみると意外と史実に即したプロットもある。とくに殿が花魁の高尾を船中で吊るし斬りにする歌舞伎

「伽羅先代萩」の「高尾、船中の場」は、埋もれていた史実を考察する大きな手がかりになる。史実と虚構のあいだを探ってみたい。

企画概要

ようにいたしますので、奮ってご利用ください。

若手研究者ネットワーク化促進企画関連ワークショップ

「世代を超えて、話し合おう」

日本近世文学会は、昨今の若手研究者数の減少や、新型コロナウイルス感染症流行以降の研究者間の新たな人的ネットワーク構築の困難などを鑑み、若手研究者のネットワーク化の促進に取り組む予定です。これに関連して、二〇二三年度秋季大会実行組織では、本年六月にオンラインでの若手研究者交流企画を実施しました。

今回は、前回交流企画での意見・要望等を反映し、「近世文学史をめぐって」「近世文学と地域社会」「近世文学とデジタル化」等、複数のテーマを考えるグループに分かれ、若手会員とより研究のキャリアの長い会員との交流や、研究に関する情報交換をおこないます。

※オンラインでの参加も可能です。企画内容の詳細については、大会特設ホームページ上で適宜、お知らせしてまいります。なお、右記のグループテーマは一例です。また、大会初日・二日目には、若手会員を中心とした情報交換スペースを会場内に設けます。参加者相互の交流、抜刷等頒布などをおこなえる

研究発表要旨

山東京伝『梅之与四兵衛物語 梅花氷裂』の再検証

——栗野十郎左衛門を通した物語構造——

早稲田大学(院) 小林 俊 輝

山東京伝の読本『梅花氷裂』(文化四年)は、曲亭馬琴が『江戸作者部類』で「勸懲正しからず」としたこともあり、低く評価される傾向にある。本発表では『梅花氷裂』の構造を見直す。

まず、物語の中心を先行説の唐琴家と梅之与四兵衛から、栗野十郎左衛門と藻の花の兄妹とした。本作は栗野が明から金魚を持ち帰り、兄妹が難に遇うことが発端となる。そして前編は栗野の死、予告より後編が藻の花が成仏して収束することから、本作は二人を中心とする因果物語であったことを示す。

また、本作の因果を覆う(読本的枠組)が金魚であることとその脆弱性が大高洋司氏をはじめ諸氏によつて指摘されている。一方で前編の登場が地の文のみの絶海禪師への言及は皆無である。栗野兄妹とのみ関わりを持つ彼は、金魚を通して作中に関わつて因果を収束させることに寄与しており、金魚が枠組と成り得るための補強する役割が担わされていたことを論じる。

そして栗野を中心に据えると、長吉の死の見方も変わる。馬

琴の言はこれを意識したものであるが、この場面は瀕死の長吉を通して栗野の犯した行爲が再現されて因果を悟ることが主題であり、長吉を大きく捉えるべきではない。彼の死は前編が収束するためのきつかけと、与四兵衛夫妻のわだかまりを解消させて後編へ繋げることに意義があることを明らかにする。

以上より、本作は栗野の因果とその末路を主軸に貫徹した構造を有しており、評価を改めるに値する作品との結論に至った。

曲亭馬琴の著作における〈悪人〉像

——文化年間初頭の作品を中心に——

大阪大学(院) 池田 真紀子

文化年間前半は、山東京伝と曲亭馬琴が類似の趣向や作品構造を用いて後期読本を執筆した時期である。二人の作品は内容が類似する一方で、それらに見える善悪の捉え方は、京伝は(仏魔(善悪)一如)、馬琴は(善人/悪人)という一定の様式が定まったとされる(大高洋司「京伝、馬琴と『勸善懲悪』」『国語と国文学』八三―五号、二〇〇六年)。他方、文化年間の初頭は、そうした様式が固まる前段階であった。京伝は『忠臣水滸伝』以降、後続の作品を刊行していき、後から参入した馬琴は、京伝の作品に習いつつ、『月水奇縁』『稚枝鳩』『石言遺響』などを執筆していく。

発表者は、そうした作品のうち、馬琴の『月水奇縁』を取り上げ、そこで〈悪人〉とされた「永原左近」を中心に、人物像の検討を行った。その結果、左近が〈善人〉と〈悪人〉の二面性をもつ人物であり、『月水奇縁』における〈悪人〉の造型が、〈善人／悪人〉の形で明確に分けられない可能性を指摘した（『月水奇縁』論―冒頭の〈冤罪事件〉に注目して―）（『上方文藝研究』二十号、二〇二三年）。

以上のことを踏まえて本発表では、馬琴の文化年間初頭の作品群を、様式が確立される前の試行錯誤の時期にあたるものとして、そこに見られる善悪の捉え方について考察を行う。具体的には、『月水奇縁』『稚枝鳩』『石言遺響』を中心に、人物造型や作品構造から、〈悪人〉像の様相を確認する。そうした上で、同時期に執筆された京伝の作品との影響関係にも言及しつつ、後続の作品群と比較して、どのような相違があるのかを明らかにする。

十返舎一九『黄金花咲陸奥帖』にみる詩歌の活用

——宗任伝説の変容と名所和歌の地誌的想像——

ハイデルベルク大学（院） フイंक ウイクトル

こがねはななくみちのくせうし
『黄金花咲陸奥帖』は文化十一年に刊行された合巻、著者は十返舎一九、画師は勝川春亭である。中村幸彦氏は本作が八文

字屋本浮世草子、江島其磧の『風流東大全』（享保十六年）に筋書きを借りた物語であることを指摘し、また小池正胤氏が作中の晋米斎筆の文案に言及するほかはあまり注目されず、これまで全体的な研究はされてこなかった。本論では合巻の翻刻をもとに物語の要約を紹介し、作品における和歌と漢詩の役割に焦点をあて考察する。

『陸奥帖』は元となる八文字屋本の登場人物と前九年合戦の時代設定を踏まえながら敵討のパロディや怪異のエピソードを交えるなどかなり改変を加えている。終幕直前の宗任伝説も趣向を改め、挿画では宗任の描写を粗暴にし、和歌に対し公家が『唐詩選』の太上隠者詩をもじった一首で返す場面がある。さらに合巻の付録に『東国名勝志』と題する和歌屏風仕立ての見開きがみえる。この付録は鳥飼酔雅の『東国名勝志』（宝曆十二年）を典拠とする陸奥の名所和歌を歌った十八首からなる。宗任伝説の改変には当時の漢詩流行、作者の公家認識や滑稽作意など、さまざまな解釈が可能である。また名所和歌の付録には地誌的想像と装飾の洒落がはたらく。両者とも視覚的斬新や文脈の変改に詩歌を活用した遊びの可能性がみえる。

近世後期における性霊派の和歌題漢詩について

九州大学（院） 王 自 強

本発表では、六如上人や江湖詩社の同人たち、いわゆる性霊派の詩人たちの和歌題漢詩を検討する。そもそも和歌題漢詩が意識的に作られ始めたのは中世からで、その流れは、近世でも継続しており、林家や木門などの詩人たちも創作していた。一方、古文字派の服部南郭は『南郭先生文集二編』（元文二年刊）巻三で、和歌題は詩題としてはならないと主張している。それに対して、山本北山は『作詩志叢』（天明三年刊）で南郭の説を批判しつつ、和歌題漢詩の創作を肯定した。

北山と同じ性霊派である六如、江湖詩社の同人菊池五山が真仁法親王や公延入道親王などの詩歌会で詠じた和歌題漢詩は、それぞれ『六如淇園和歌題絶句』（文化十五年刊）と『五山堂和歌題絶句』（天保十年序刊）に収められている。また、大窪詩仏らが編んだ、清新な詩を作る際の指南書『清新詩題』（文政十二年刊）には、多くの和歌題が収録され、六如らの和歌題漢詩集に使われた題と同じものも見られる。このように、性霊派の詩人たちは、和歌題を蒐集したり和歌題漢詩を詠んだりしている。

これまでの性霊派の研究では、宋詩の影響、とりわけ竹枝詞の創作と清新性霊の詩風との関係が注目されてきた。しかし本

発表では、性霊派の和歌題漢詩における典故や表現を分析し、和歌題で詩を詠むことが、清新性霊の詩風を実践する方法の一つだったということを指摘する。

『玉篋子』三ノ一「清水寺の詩」における典故と石川丈山像

名古屋大学博士研究員 森 翔 大

『玉篋子』^{（元禄九年（一六九六）刊）}は、林義端^{（はらじぎたん）}の怪談物浮世草子である。その三ノ一「清水寺の詩」^{（せいすいじ）}は、石川丈山をモデルとした詩仙堂石処士と門人の幽霊が、隠棲する儒者小野久庵のもとを訪れ、詩の唱和や茶談義をし、帰り際に火災の予言を残したことで、久庵が火難を逃れるという話である。

先行研究に部分的な指摘はあるものの、話全体の典故は不明であった。本発表では、本話の典故として石川丈山の詩話詩論を集めた『北山紀聞』^{（元禄五年（一六九二）刊）}を指摘する。会話の内容や唱和される次韻詩、茶に関する知識、さらには「久庵」という名前までも『北山紀聞』に依拠しており、義端は『北山紀聞』の詩話を複数組み合わせさせて本話を構成していた。

『武家義理物語』^{（貞享五年（一六八八）刊）}三ノ二「約束は雪の朝飯」には小栗何某と隠棲した丈山との親交が描かれており、義端は先行する浮世草子を意識して本話を執筆したと考え

られる。一方で、義端は武士ではなく丈山の詩人としての側面を前面に押し出し、詩を楽しむ久庵らの姿を描いている。古義堂門下の儒者として詩会に参加し、詩集を編纂・出版していた書肆、義端ならではの着想と丈山像を見出すことができる。

また、死者との交流という話の大枠は『伽婢子』（寛文六年（一六六六）刊）七ノ六「菅谷九右衛門」の影響があり、火災の予言に、寛永六年（一六二九）の清水寺の火災という史実を織り交せている点など、義端の執筆手法についても考察したい。

乃翁の東北行脚と『去来抄』故実編

日本女子大学 福田 安典

黒星乃翁は、向井氏、伊予国三津浜の豪商で、利屋伝三郎、迎阿と称した。年寄役を退いて二十四年間全国を行脚し、明和七年の蝶夢本『奥の細道』の刊行を見ることなく同年に伊予で没した。彼は奥州行脚帰途の足利で『去来抄』を入手した。安永四年、暁台による「故実」編を欠く版本が出版される前に、彼が手にした『去来抄』は「故実編」を備えるものであった。この乃翁本は江戸松山藩邸周辺で複数書写され、その一本が、三浦若海を経て現在天理図書館に所蔵されている。頼原退蔵が岩波文庫『去来抄・三冊子・旅寝論』（一九三九年）を編む際に「故実」「修行」の二編について、この三浦若海旧蔵本を底

本としたことにより乃翁が注目され、星加宗一や松井忍らによって論じられてもいる。『去来抄』「故実編」については、乃翁系とは別に淡々系の別本が複数伊予で書写され、復本一郎、岡田彰子、神野昭らによって紹介され、それらの諸本および乃翁系との関係については、松井忍が『去来抄解』「故実篇」と伊予俳壇」（『連歌俳諧研究』、百十一号、二〇〇六年）で基本的な整理を行った。しかしながら『去来抄』を江戸藩邸で閲覧した詳しい状況などについて不明な点が残されている。本発表では、改めて乃翁の事績や周辺人物を詳細にした上で、如上の問題を検討してみたい。

会場へのアクセス



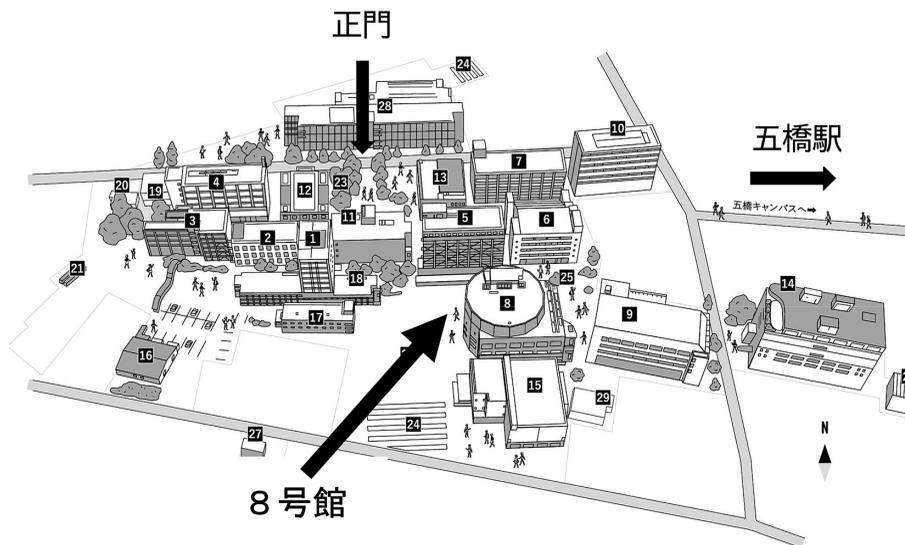
〒 980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目 3-1

JR「仙台駅」から徒歩約 20 分

地下鉄南北線 「五橋駅」南 1 出口または

「愛宕橋駅」西 1 出口から徒歩約 5 分

会場案内図



講演会会場	8号館 5階ホール
研究発表会場	8号館 4階 842教室
ワークショップ会場	8号館 3階第3会議室・第4会議室
委員会会場	8号館 3階第3会議室
編集委員会会場	8号館 3階第3会議室
休憩室（研究発表会・昼休み）	8号館 3階第4会議室
書籍販売・情報交換ブース	8号館 3階第2会議室

【懇親会会場】

江陽グランドホテル 翡翠の間
〒980-0014 仙台市青葉区本町二丁目3-1

地図（Google Maps） ※当日、学会会場でも地図をご用意いたします。



